日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院　21世紀社会デザイン研究科

Social Designer vol.30

巻頭インタビュー

「地域」と「教育」を考える
——社会を軽やかに生きるために

人材育成のプロ、水谷智之さんに聞く
大切なのは、「WILL(意志)」と
「勝算が見えなくても一歩目を踏み出す力」

人材育成の現場で長く活躍されてきた経歴を持ち、現在は一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事として島根県の離島で公教育の魅力化に取り組む本研究科アドバイザリーボードメンバーの水谷智之さんにお話をうかがった。
【インタビュアー:萩原なつ子 研究科委員長・教授】

水谷 智之（みずたに ともゆき）さん
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科アドバイザリーボードメンバー。慶応義塾大学商学部卒業後、1988年㈱リクルート入社。「リクナビNEXT」編集長、人事担当取締役を経て、2011年㈱リクルートエージェント代表取締役社長。2012年~2016年㈱リクルートキャリア代表取締役社長。現在は、一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事、学校法人社会人大学院大学至善館理事兼特任教授、㈱オプトホールディング取締役兼指名・報酬委員長、島根県隠岐島海士町(あまちょう) プロデューサー、内閣官房教育再生実行会議有識者メンバー、経済産業省「未来の教室」委員。

萩原 なつ子（はぎわら なつこ）
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科委員長・教授。
(公財)トヨタ財団アソシエイト・プログラム・オフィサー、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学環境情報学部助教授を経て現職。認定NPO法人日本NPOセンター副代表理事。専門分野は環境社会学、非営利活動論、ジェンダー論。

—— 地域の教育から日本の未来と社会を変える ～経営・人材ビジネスから公教育の世界へ

萩原／島根県隠岐の島、海士町(あまちょう)(※1)を拠点に公教育の魅力化に取り組まれるようになったきっかけを教えてください。

水谷／リクルートでは、企業の採用支援や人材を育成する仕事をしていました。採用支援では企業がどういう人材を採用したいのかを聞くんです。どういう人間ならばチャンスを与えるのか、どういう人間にはチャンスを与えないのか。新卒採用をする企業は大体クライアントに回りました。日本で最初のUターン・Iターンの専門の転職雑誌を作ったり、インターネット転職サービス「リクナビNEXT」を立ち上げる際に編集長を務めたりもしました。しかし、都会の大企業が若者を吸い込む流れに対してある意味、僕は人材ビジネスの経営者としては本当の挑戦はできませんでした。というのも、日本中から若者が都会へと流れてきて、帰っていかない。国の地方創生政策で地方に交付金は配られたりもしましたが、地域にはやる人がいないから、地方への新たな人の還流は生まれない。結局、僕は東京や大都会の吸い込みポンプのボスをやっていたのです。リクルートでの経験から “地域の人材” というテーマが僕の中に残りました。

また、長年、社会人の人材育成・採用ビジネス一筋で仕事をしてきましたが、不条理な採用シーンを見ることもありました。「どうしてこの子は、勉強もこんなにできるのに、就職のスタート位置につくチャンスをつかめなかったのか。」仕事をすればするほど、そういった思いは溜まっていきました。

僕がやってきたのは、人の、子供時代の考え方、経験、身につけてきた力を見る仕事でもあったんですね。そう考えた時に“教育”というテーマはすごく大きく、そこから「地域」と「社会を軽やかに生きる力」とは何なのかを子供に誰が伝えるのか、これがずっと残ったもう一つのテーマでした。

自分を育んでくれた「地域」を自分たちでもっと素敵な地域にしようという意志を持った若者を、地域で育てていくことが大事。人口の半分は地域にいて、多くの人が公教育を受けている、つまり「公教育は地域にある」と思っています。地域の公教育の魅力化に身を置こうと思い、リクルートを辞めてからの1年間、勉強のために全国を回りました。

全国を回った中で出会ったのが島根県の島、海士町だったんです。この島が地方創生の先進地として知られるようになった理由は高校改革です。そこで、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームを設立し海士町の島前(どうぜん)高校の改革を成功させた(※2)島根県教育庁教育魅力化特命官の岩本悠さんと、公教育改革を進めていくことになりました。

—— 社会を軽やかに生きる2つの力:WILLとACTION

萩原／「社会を軽やかに生きる力」について、もう少し詳しく聞かせて頂けませんか?

水谷／「社会を軽やかに生きる力」というのに、大事なことは二つだと思っています。

一つ目は、自分の「WILL(意志)」を育み持つこと。課題解決型学習といっても、本当に心の底からやりたいという思いがどれ

ほどあるのか。自分で見つけて自分でやろうと決める、このエネルギーがないと、人生どこで何をやっていても、大人の世界って正解が一つもない。正解がないのに自分で切り開いていく、というのは、そこに自分で何とかしたいという思いがないといけない。「WILL」とCANとMUSTでいえば、例えばCANはたくさん出来る事を増やしなさい、これは学校にいっぱいあるし、MUSTは嫌でも降ってくる。しかし、「WILL」を育むというのは社会の中であまり誰も手助けしない。社会のシステムとしては無い。僕の息子は今高校3年生なのですが、「英語はしっかり勉強しておけよ。これからの時代は英語、いいから英語だけはやっとけよ～。」と中1のときから何度言っても、全くやりませんでした。僕から言われるうちはMUSTで、学校ではCANなのです。それが、ある時サッカーの試合を観に行った時の事、試合が終わった後に外国人選手と握手をした。ただそれだけ。その時にしゃべれないと思ったのか、しゃべれない自分が恥ずかしいと思ったのかは分かりませんが、帰りの電車の中で「お父さん、俺、英語やるわ。」と言いまして、今は英語が一番好きな科目になっています。この「WILL」を育む機会ってなかなかないんですよね。

自分の「WILL」が見つかるまでには、時間的に大きな個人差がある。学校の50分の授業でそれを底上げ出来ないので、そこを端折って、その課題やテーマを大人が渡してしまう。そうすると、それはもう、自分の「WILL」ではなくて、その瞬間にMUSTになります。自分の「WILL」を探すということは、時間がかかるし、すぐに見つからないし、見つかったとしてもそれが本物の「WILL」ではないかもしれなかったりして、すぐにくじけたりする。それでも自分は、何にワクワクし、エネルギーを使いたいと思うのか。だから僕は、学校の中ではなく街に出て、ワクワクが見つかる機会がすごく大切だと思います。

二つ目は、行動（ACTION）なのです。もっと分かり易く言うと、「勝算が見えなくても一歩目を踏み出す力」。正解にはやく近づく生産性の時代にはPLANというのはすごく大事だったが、正解がない時代に自分の人生を切り開いていくには、PLANの精度を上げる時間があったらACTIONして、上手く行かなくて、痛恨の思いをしたりすることのほうが大事でしょう。「チキショー！」「何とかしてやる！」という痛恨の思いは、「WILL」の“たまご”ですよね。「勝算が見えなくても一歩踏み出す人」というのは、実は踏み出しだけ必ず自分の力になっていたり、心のエネルギーになったりしている。

けれども、このACTIONも、公教育の中の限られた50分という時間の中でやらなければならない、というと、最初からバッと動ける者もいれば、全然動けず何カ月も悶々としている子もいる。だから、大人は、組織は、この時間が待てないから、「こうやって動こうぜ」と言って先に指示をだしてしまう。

僕は、「WILL」と「勝算が見えなくても一歩目を踏み出す力」、極端にいえば、これだけがあれば人間には学んでいく力が備わると思います。だから学校で今そのような教育をやろうとしています。大事なのは、PLANのレベルは問わない、成果を問わない、それから、時間がかかることを問わない。これって、結構大人は勇気が要るじゃないですか。

萩原／はい、要ります。「評価」の時代で、しかも、Outcome（成果主義）、Social Impact（社会的インパクト）が問われますからね。

水谷／そう、そうそう。最終的にはImpactなんだけども、そのImpactまでたどり着くためのエネルギーでほんとに大事なのは、WILLと勝算のないACTIONだと思います。それとどこで何をやっていても、しなやかに軽やかに生きて行く、そして楽しめる。それが大事だと思います。

—— 社会人の学び直し ～ワクワクすることを見つけられる大人に

萩原／今、21世紀社会デザイン研究科のアドバイザリーボードメンバーをして頂いていますが、社会に出てからもう一度勉強しようという大人は「WILL」の部分が相当強いと思うんですよね。社会人大学院に対してはどのようにお考えでしょうか。

水谷／学び直しのエネルギーというのは、現地・現物を見たり聞いたりできる機会をどれだけ作れるかが、大学でもいろんな企業でも大事だと思います。学び直さないと生きていけないから、生き残るために学び直しがあるのは、僕はもったいないと思います。「俺、知らなかった、もっとこんなにワクワクするテーマがある」と気づいて自分でする学び直しと、「このままだと、一つの会社に定年まで居られないから、何かを身に付けよう」という学び直しは、人生ではだいぶ違いますよね。僕は、現地・現物で、自分もワクワクできるようなものを大人も見つけられるような副業時代が到来して、そういう働き方改革になっていって欲しいと思います。

萩原／経営学者のドラッカーが提唱する“パラレルキャリア”には、今のようなお話が当然入ってくると思います。若いうちから「学ぶ」ということと、「働く」ということが、まさにパラレルで来るような時代の到来を感じますか？

水谷／感じますね。自分もまさか50歳を超えて、いくつも同時に仕事をするとは思いませんでしたね。いくつやっているんだか、どれが仕事でどれが趣味なのか、もう分からないです。仕事をしていると言うと聞こえはいいですが、実は僕自身が勉強しているんですよ。

萩原／“わ～くわ～く”のWORKですね（笑） エネルギー使いますけどね。

水谷／ものすごく使いますよ～。（笑） いや～、おもしろいなぁと思います。

萩原／今日は本当に貴重な、そしておもしろいお話をありがとうございました。

(※1) 海士町：島根県・隠岐（おき）諸島の「中ノ島」にある町。約2,400人が暮らす。

(※2) 若者の流出と少子化の影響で廃校寸前に陥っていた島根県立隠岐島前（おきどうぜん）高校は、「魅力化プロジェクト」などの取り組みにより、今では全国・海外からも志願者が集まる学校へと生まれ変わった。またこの島は近年、現役世代のIターンの増加で地方創生の先進地としても注目されている。

石川 雄一 さん
（いしかわ ゆういち）

大熊ゼミ所属。鎌倉生まれ東京育ち。大学卒業後損害保険会社に入社、主に営業畑で全国転勤を経験。自動車メーカーの保険関連会社を経て定年退職。立教セカンドステージ大学1年修了後、2017年に21世紀社会デザイン研究科に入学。博士課程前期2年。

オジサンをデザインする?

21世紀社会デザイン研究科を目指している皆さん、あなたは今人生最高の気持ちを味わっています。昨年4月に入学し、院生生活1年生をエンジョイしている皆さん、あなたは久々に人生最高の日々を楽しんでいることでしょう。一歩前へ!　これがチャンスをつかむマジックワードです。しかし私を含む2年生は、パラダイスを抜けて苦しみの中にいます。楽しみは風のように去ってしまう。

21世紀社会デザイン研究科は他に類を見ない不思議な場所だと思います。先生も学生も実にユニークな人が多い（自分は普通、と思っている?）。「オジサンをデザインする」、これは私の論文のタイトルです。サラリーマンて何だろう、長年やっていて考えたことをタイトルにしました。私は40歳の頃に、昔やっていたヴァイオリンを持ち出しアマチュアオーケストラに入団しました。8年半単身赴任をしましたが、そのときも任地のオーケストラに入団して、充実した時間を過ごすことができました（仕事も真面目にやりました）。今では音楽活動が仕事です。「仕事」と「稼ぎ」とは別ですからね。さらに研究が加わりました。定年後にも輝いている中高年者は沢山います。彼らに共通するのは、サラリーマン時代にも自分を忘れていなかったこと。現役の皆さんは厳しい環境におられるでしょうが、夢を実現したいなら早く始めた方が良いです。でも、こんなタイトルの修士論文が通るでしょうか。もし合格したならばそれは、21世紀社会デザイン研究科のふところの深さを証明したことになるでしょう。

只木 良枝 さん
（ただき よしえ）

長坂ゼミ所属。1966年京都生まれ。大学卒業後、20代30代は住宅・建設業界で公私ともに荒波に翻弄される。ベトナムの日本人補習授業校で教員と事務局を経験し、帰国後はライター&編集者として教育問題に関わる。博士課程前期2年。

二つの問いを繰り返す

教育系の大学院を探して決めあぐねていた時、研究科主催のインクルーシブ教育の講演会を聴講。教育の場をめぐるディスカッションに「これは」と予感があって、翌月の説明会に参加しました。個別相談で「お、教育? いいねー! 社会デザインだねー!」と言ってくださった先生の笑顔の頼もしかったこと。私がやりたかったのは教育学ではなく、教育のデザインだったのです。

ゼミでは「社会デザインとしてどうなのか?」といつも問われました。防災から法や人権、QOLから街おこしまで、どんなテーマでも鉱脈を見つけてフルパワーで掘り進むマルチ重機のような先生と、分野を超えて共鳴する人材と知恵。人やモノが有機的につながって課題解決に立ち向かう光景はまるでタイムラプス動画を見ているようで、社会デザインの力を実感しました。つられて自分も手を出してみると、世界が広がり誰かとつながり、また自分に戻ってくる。その繰り返しでした。

政策論の先生には、「誰を救いたいのか?」と問われました。現場の課題を追うことにばかり気を取られ、その解決策に考えが及んでいないことを看破されたのでした。政策なんて国のやることで、私が「救う」なんておこがましい。でも救うためのデザインはできる。それが大学院に来た意味なんだと気づきました。研究に行き詰まると、いつもこの言葉が、張りのあるバリトンで脳内再生されます。

さて、この二つの問いに答えを示せるのか――。うんうんうなりながらパソコンに向かう、論文仮提出4週間前の私です。

遠田 光弘 さん
（とおだ みつひろ）

指田ゼミ所属。早稲田大学卒業後、非鉄金属メーカーに入社。工場で生産管理、原料調達、本社で営業総括、経営企画を経た後、リスクマネジメント部門立ち上げより参加。本年4月に化学メーカーに転職し、リスクマネジメント体制構築に従事。博士課程前期1年。

一歩踏み出すこと

「何かおかしいな。」大学院に入ろうと思ったのは、仕事上のふとした疑問からです。私は勤務先で様々な部署を経た後、リスクマネジメント体制の構築に従事してきました。当時、会社の誰もリスクマネジメントに関する知見もなく、コンサルティング会社の助言のもと、一通りの体制を構築しました。しかし、せっかく構築した体制が、果たして有効に機能しているのか、当事者ながら疑問が深まるばかりでした。コンサルティング会社に聞いても、本で調べても、疑問は解消されないまま。「どこかリスクマネジメントを学べる場所はないか。」と探していたところ、本研究科にたどり着きました。「これだ!」と思い、その勢いのまま本研究科への進学を決めた次第です。

昨年から、日本を代表する企業において、相次いで不祥事が発覚しています。不祥事を起こした企業の多くは、一見立派なリスクマネジメント体制を構築しているように見えます。しかし、第三者委員会等の報告書でも指摘されているように、それが有効に機能していませんでした。なぜ多くの企業でこのようなことが起きてしまうのでしょうか。

現在私は、「リスク情報の伝達を阻害する要因」を社会心理学等の視点から考察しています。文献、先行研究を調べ、ゼミで議論していくうちに、少しずつ方向性が見えてきました。先は長いですが、一歩ずつ進んでいきたいと思います。一歩踏み出すことが、新たな発見、出会いにも繋がります。迷ったら、一歩踏み出してみましょう!

村上 智美 さん
（むらかみ ちはる）

稲葉ゼミ所属。1995年生まれ。共立女子大学国際学部国際学科卒業。学部在学中にベトナムやタイ、ラオスなど9か国を訪れ、様々な国の文化や生活に触れる。現在の研究テーマは「日本における人身取引」。博士課程前期1年。

誰かのためが自分の学びに

学校に行き、勉強をして、帰ってきたら習い事に行く。代り映えのない日々。当たり前になりすぎてしまった毎日に「なぜ学校に行かなければならないのか。」そんなことを考えていた時期があった。そんな時に見た、途上国の現状を映したドキュメント番組。小学生の私が不満を持っていた日常が、当たり前ではない人たちがいることを知り、衝撃を受けた。そして「誰かのためになることがしたい。国際協力の道に進みたい。」そう思うようになった。

その思いのまま、大学へ進学。学部在学中に訪れた国々では、様々な国際協力の現場を視察させていただいた。国際協力の道に進みたいという気持ちは変わらず、むしろ強くなる一方であった学部の4年間。そんな4年間を経て、卒業後の進路を考えたとき、就職ではなく大学院への進学を決めた。

進学を考えた際、ふと「日本はどうなのだろう。途上国よりも優れていると言えるのか。」Yesとは思えなかった。そこで、本研究科では、今までずっと関心を持っていた現代の奴隷制が日本国内で起こっている問題でもあることから、「日本における人身取引」をテーマにすることにした。

研究に躓き、悩むこともある。そんな時様々な研究テーマを持つ仲間の存在はとても大きく、日々助けてもらうことばかりである。「誰かのため」という漠然とした目的で関心を持ったことが、結果的に「自分のため」の学びになっていると感じることが多々ある。自分の学びを「誰かのために」活かせるよう、今できる学びに熱を注ぎたい。

人生の転回と飛翔の原点

2009年卒
安齋 徹 さん
（あんざい とおる）

企業勤務（NY赴任、社長秘書、部門の人事統括責任者など）、群馬県立女子大学教授を経て、目白大学メディア学部教授。聖心女子大学非常勤講師。社会デザイン学会理事。日本ビジネス実務学会「関東・東北ブロック研究会」サブリーダー。博士（学術）（早稲田大学）。2009年3月、博士課程前期課程修了。

あれから10年、人生が転回しました。サラリーマンとして、営業・企画・事務・海外・秘書・人事・研修など様々な業務を経験していましたが、学びへの希求が高まり2007年に21世紀社会デザイン研究科の門を叩きました。幅広い知見を持つ教員と異業種・異世代の院生との交流は、価値観や人生観を揺り動かし、「人の成長を支援し、笑顔を増やす」というミッションも自覚しました。「企業人のボランティア」というテーマを深めようと2009年に早稲田大学の博士課程に移り、研究を続けました。「50にして天命」を知り、2012年に大学教員に転身しました。群馬県立女子大学では「社会デザイン」を冠したゼミナールを創設しました。これからの社会やビジネスを如何にデザインするかを探求し、「日本一のゼミ」を目標に掲げました。大学における教育の理想を追求した足跡は、朝日新聞〈群馬版〉の「社会デザイン便り」というコラムで発信する機会を頂きました。2015年に博士課程を修了、2016年に『企業人の社会貢献意識はどう変わったのか～社会的責任の自覚と実践～』（ミネルヴァ書房）を上梓しました。

これから10年、人生は飛翔します。2018年に群馬での教育の成果をまとめた『女性の未来に大学ができること～大学における人材育成の新境地～』（樹村房）を通じて、コミュニケーション・リーダーシップ・クリエイティビティを軸とした未来人材育成モデルを提示しました。現在は目白大学に移籍し、新設のメディア学部で、これまでにない「社会連携プログラム」の構築に邁進しています。社会をキャンパスに見立て、未来を切り拓く人材を育てるという血沸き肉踊る挑戦はスタートしたばかりです。日本と海外、企業と大学、東京と地方、ビジネスとソーシャル、理論と実践、など様々な経験値や対立軸が融合・止揚し、やりたいことが無限に広がっています。

社会デザインの営みに関わる人生の転回と飛翔。その原点が21世紀社会デザイン研究科でした。

学びを実践につなげていくこと

2017年卒
藤井 綾美 さん
（ふじい あやみ）

2010年(株)アダストリアに入社。店舗での販売経験を経て、2014年より広報およびCSRを担当。CSR方針の策定やダイバーシティ推進、CSR調達など、活動の企画・運営を行う。2017年3月、博士課程前期課程修了。

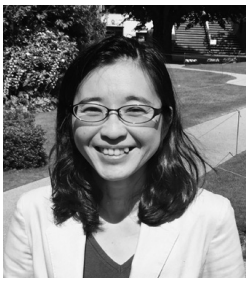
私は、Social Designer vol.23で社会人学生の立場から、“なぜこの研究科を選んだのかと今の学生生活”について寄稿しました。そこでは、こんな言葉で文章を締めくくっています。「この研究科で出会えるすばらしい先生と仲間とともにここでの経験を存分に吸収し、社会に還元できればと考えています。」それから早いもので3年。楽しかった学生生活はあっという間に過ぎ去り、会社で忙しい日々を送っています。

今回の寄稿にあたり、卒業してからこれまでを振り返ってみました。卒業してから私は「せっかく大学院まで行って、学んだのだから、何か活かさなければいけない」と焦っていました。自分の学んだことを活かすには、別の場所がいいのではないかと考えて転職活動をしたり、卒業してからの1年半は、悩んでもがき続けた日々でした。しかしながら、振り返ってみるとこの研究科の縁でいただいたチャンスが多くあったこと、そしてこの研究科で出会った方達に支えられた1年半だったことに改めて気が付きました。研究科を一緒に卒業した友人や研究でお世話になった先生、先輩方から自分の仕事や研究について話す機会をいただき、これまで上手く言葉で表現できていなかった自分の考えを様々な場面で話すことができるようになりました。仕事で悩んだ時も、研究科を卒業した友人に話すたびに、思考の幅がいつの間にか狭くなっていたことに気付かされてきました。所属の違いを越え、本来どうあるべきかを対等な立場で対話ができる人がいる、ということは本当に貴重なことだと実感しています。

今私は、CSR担当として、社会貢献活動だけではなく、企業がより社会課題へ向き合えるよう仕組みづくりを進めています。ステークホルダーとの対話を通して企業が社会における自社の役割を認識するきっかけをつくり、事業プロセスの中で向き合うべき社会課題を可視化すること、そしてそれを活動につなげていくことを考えています。学びを実践に活かすことは難しいことですが、悩んだ時は研究科で繋がった方々が協力してくれることに本当に感謝しています。

社会デザイン学とは
～私たちの「隣にある問題」を考える～

村尾 るみこ 助教



村尾 るみこ（むらお るみこ）
日本学術振興会特別研究員（PD）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員を経て、現職。ザンビア大学社会経済研究所客員研究員。日本アフリカ学会評議員。専門は地域研究（アフリカ）、人類学。研究分野は、地域社会の社会経済変化、難民・帰還民研究、アフリカ農民研究。

科目名：社会デザイン学特殊研究14（担当教員:全専任教員）
テーマ：社会デザイン学の可能性
授業の目標：本研究科が一貫して追究し続けてきた社会デザイン（学）に関し、その思想的含意から実践的な社会技術としてのありように至るまで、分野・領域横断的に明示することで、まずはその見取り図を描いていこうとするものである。

21世紀社会デザイン研究科では、「社会デザイン学の可能性」と題したオムニバス講義を毎年開講しています。この講義は、受講生が新しい形の貧困や社会的排除といった今日的な社会課題を深層から捉えるにあたり、従来の発想と方法論を超え、社会の仕組みや人々の参画の仕方を変革し具体的に実現していくための思考と実践を、全教員とともに議論する興味深い場です。各回で扱われるテーマは、社会デザイン（学）とは何か、その思想的背景と意味、組織・ネットワーク・マネジメント、コミュニティデザイン、危機管理、NGO/NPO、平和（学）、国際関係、CSR、社会貢献、ソーシャルビジネス・コミュニティビジネス・社会的企業、社会的排除と包摂、アートと社会デザイン、社会調査等、多岐にわたります。

この講義は、本研究科で学ぶ院生のための社会デザイン（学）案内であり、具体的な研究分野とテーマを選択していく際の導入科目として設置されています。それと同時に、社会デザインを考えるためにいかに多様で具体的な分析資料（データ）を加えていくのかを検討する科目としても重要な意味を持っています。受講生が、今後の研究活動のなかで社会デザイン（学）の可能性をどのように拓いていくのか、その方法論をともに考え抜く場を提供するための内容で計画されています。こうした本講義の位置づけを活かし、2018年度からは全14回の講義のうち6回を一般公開しました。合計で約50人の一般参加者に来ていただき研究科での講義内容や雰囲気を楽しんでいただきました。

ファシリテーターとして毎回講義に参加していると、研究科の教員の専門領域だけでなく、受講生が関心を寄せる研究がいかに幅広いかが見えてきます。そして「社会デザイン」が、否が応でも包含せざるを得ない、私たちの「隣にある問題」の深さを実感してきました。

私自身は人類学やアフリカ地域研究を専門としており、既存の学問領域や地域の枠組みを超える視点の重要性を、アフリカと日本、欧米等との比較を通じて話してきました。人類学やアフリカを知る・知らないに限らず、今日の人間集団の営為を真摯に捉えようとする点では、共に現場や先行研究に学ぶ者として受講生の皆さんとともに試行錯誤させていただきました。今後もぜひより多くの方に受講していただきたいと思います。

学生の感想紹介

長ゼミ
博士課程前期 1 年
坂口 侑吾さん
（さかぐち ゆうご）

21世紀社会デザイン研究科に所属する先生方のリレー講義は、自分の研究を進めていく上で大変勉強になりました。私は平和構築の研究をしておりますが、この講義を通して学んだことは、「芸術を通した平和構築」です。文化やアートを専門とされる若林先生の講義を聞き、平和構築とは政治や経済だけではなく、文化やアートを通しても出来るのではないかと考えることができました。

幅広い分野の専門家の方々のリレー講義は、自分の研究だけではなく、今後の人生の糧となるような学びが得られました。また、受講生の方々も幅広い分野に携わっておられるため、鋭い質問も飛び、講義を受けていて刺激を受けることができました。

日ごろ見ることのできない教員の“学外の顔”を紹介します

21世紀の吟遊詩人

指田 朝久 特任教授

（さしだ ともひさ）

立教大学21世紀社会デザイン研究科特任教授兼東京海上日動リスクコンサルティング株式会社主幹研究員。東京大学工学部卒業後東京海上火災保険にシステムエンジニアとして入社。その後現会社立ち上げ準備部門に人事異動し現職。危機管理、災害対策、情報セキュリティ、コンプライアンス、などリスクマネジメント全般のコンサルティングを行っている。京都大学大学院博士（情報学）、気象予報士、システム監査の資格を持つ。

大学院ではNPO経営やソーシャルビジネスを志す皆様に、経営に必要なリスクマネジメントを中心とした講義を行っています。また、災害対策については市民と企業と行政の役割などについて社会デザインの観点から講義を行っています。

災害対策のコンサルの関係で気象予報士を目指したのですかと聞かれるのですが、気象予報士の資格をとるきっかけとなったのは趣味の流れ星の観測です。空がきれいなところではいつも1時間に10個以上の流れ星を見ることができます。この流れ星ですが、毎年きまった時期に多く見られます。しし座流星群やペルセウス座流星群、ふたご座流星群などが有名です。毎年決まった時期とはいうものの、多い年と少ない年があり、なぜなのかが昔からの議論の的でした。最近かなり有望な理論が出てきていますが、その理論どおりなのかは実際に観測してみないとわかりません。プロだけでは全世界をカバーできないのでこの分野はアマチュアの活躍ができる分野です。

その流れ星観測ですが、晴れてなければ見ることができません。そこで台風や水害などの防災のコンサルにも役に立ち、趣味にも活かせる気象予報士を目指したのでした。おかげさまで第1回の試験で資格を取ることが出来ました。しかし気象庁の予報と匹敵する予報をするにはまだまだ力不足です。技術の維持に研修会などに出来るだけ参加し、テレビの予報を解説する程度には役立っているとおもいます。とはいえ、資格をとってすぐ妻から「布団干しても大丈夫？」といわれて、天気図を見ながら大丈夫といって会社にでかけたのですが夕立があり、それ以降妻には相手にしてもらえなくなりました。

もうひとつの趣味は音楽です。昔はシンガーソングライターを目指し（？）て、ポピュラーソングコンテストに応募し、1回だけ2次予選まで行ったことがあります。残念ながらそこで敗退し、プロになる人はやはりすごいなと感心しました。今はおとなしくたまにピアノやギター演奏で楽しんでいます。音楽にかぎらず演劇等芸術の分野も21世紀社会デザイン研究科の重要な研究分野です。

今年は大阪北部地震や北海道胆振東部地震、西日本豪雨に台風21号、24号の災害がありました。地球温暖化は確実に進行しています。気候変動と風水害リスクも私の研究範囲となります。少しでも災害の少ない世の中に貢献できたらと思っております。

夏の銀河を流れるペルセウス座流星群の流星。毎年8月13日ごろにピークを迎える。
空がきれいなところでは多い時は1時間に100個以上見ることができる。

2018年6月28日(木)、7月2日(月)、7月9日(月)、8月19・20日(日・月)開催

立教大学社会デザイン研究所 大和ハウス工業株式会社寄付講座
文化の居場所を考える 21世紀の文化の容れ物 変容するビルディングタイプ

主催 社会デザイン研究所
共催 立教大学21世紀社会デザイン研究科
協賛 大和ハウス工業株式会社

ソーシャルシアター、哲学カフェ、シェアオフィス、ハウスグランピング、公共空間の開放的利用など各々の伝統的ビルディングタイプが担っていた文化的背景とそれとは異なる空間デザインが登場した社会的変化、今後についてビルディングタイプごとに見ていくとともに、タクティカルアーバニズムのような、新しいデザインと使われ方を生み出す方法論についても紹介していく、ユニークかつ文理融合学際型テーマの講座が開講です。

前期には、講座開講記念として特別講演会を6月28日(木)、第一回講座「公園／広場」を7月2日(月)、第二回講座「オフィス」を7月9日(月)に開講しました。更に、夏季休暇中には、若葉町ウォーフという横浜のアートセンターを会場に、一泊二日の学生ワークショップと研究会を、8月19・20日(日・月)に実施しました。参加者は社会人や他大学の学生が多く、身近な話から専門性の高い内容を含んだ幅広い講義となっており、熱心に聞き入る受講者の姿が見られました。引き続き後期講座も、社会デザインと建築、各テーマの研究者・実務家が集まり、講師とゲストによる講演と対談から21世紀のビルディングタイプを整理する糸口を探します。回を重ねるごとに深まる議論に期待です。 (中村陽一)

2018年7月18日(水)～9月8日(土)開催

21世紀社会デザイン研究科×日経ビジネススクールPresents
「ソーシャルデザイン集中講座2018」

主催 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科、株式会社日本経済新聞社
共催 立教大学社会デザイン研究所

日経新聞共催講座「ソーシャルデザイン集中講座」が今夏も開催され、たくさんの熱心な社会人受講生にご参加いただけました。7回目となる今年は、「アドバンスコース」を設定しました。過去に受講された方々から「もっと学びたい！」という声を頂き、実践的なグループワーク中心の石川治江先生のクラスを「アドバンスコース」に変更。社会活動の実践家をお呼びし、多様なソーシャルデザインの現場を理解するユニークな講座となりました。

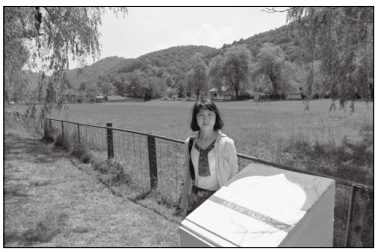
一方の「基礎コース」は、「本講座の顔」である中村陽一先生がソーシャルデザインの理論、実践例をシャワーのように発信。受講生の熱量が上がったところで、高宮知数先生の講義では超高齢社会に移行していく日本の姿を大きな視点で提示。3番手の広石拓司先生は、視点をグローバルにまで広げ、SDGsの今と日本の課題を力説。4番目の指田朝久先生は徹底したリアリズムで危機管理の社会的意味合いを解説。そして「ニューフェイス」として大熊玄先生が登壇し、童話や童謡を題材に社会を哲学する意外性で受講生を魅了。最後に私がビジネスと社会の今日的課題を共有しました。

今回はたくさんの卒業生・在学生TAにもご支援いただき、講義のみならず、大切な交流機会である講義後の懇親会も大いに盛り上げていただきました。本講座は、越境学習のひとつの在り方を示していると実感できた夏の3ヵ月でした。
みなさま、ありがとうございました！ (梅本龍夫)

死者を記録する
～ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争の犠牲者をめぐって～

長 有紀枝 教授
（おさ ゆきえ）

21世紀社会デザイン研究科教授。NPO法人難民を助ける会理事長。著者に『スレブレニツァ あるジェノサイドをめぐる考察』（東信堂）、『入門 人間の安全保障』（中央公論新社）など。担当授業は『グローバルリスクガバナンス演習4（ダークツーリズム）』『同22（国際社会の危機管理・ホロコースト再考）』など。



虐殺現場の一つとなったサッカー場で

1990年代から2000年代初頭にかけて、旧ユーゴスラヴィア解体の過程で生じた一連の紛争の中でもっとも凄惨かつもっとも多くの被害者を出したのが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争です。私は、当時日本のNGO難民を助ける会の駐在員として、難民や国内避難民の支援活動に従事しつつ、その紛争を目の当たりにしました。後に旧ユーゴスラヴィア国際刑事裁判所（ICTY）で有罪判決を受ける人々とも一部面識がありました。そうしたことから博士論文では、スレブレニツァで発生した集団殺害事件を扱い、また現在、科学研究費補助金の助成を受け「ICTY判決とジェノサイド後の社会の相克―スレブレニツァを事例として」と題した研究を行っています。

昨年、一昨年に続きこの夏も現地に滞在し、ICTYで有罪判決を受けた元服役囚や、公判中の被告家族、スレブレニツァ事件の遺族など多くの関係者に面会しました。その中の一人がミルサド・トカチャ氏です。ボスニア紛争の犠牲者数は、諸説あるものの長らく約20万人とされてきました。しかし近年、この犠牲者数を大きく修正したのがサラエボの民間シンクタンク「リサーチ・アンド・ドキュメンテーション・センター（RDC）」です。その代表トカチャ氏らは10年におよぶ丹念な調査の末、紛争期間中のボスニア内のすべての死者の姓、名、父親の名、生年月日と生地、民族、軍人・文民の別、所属部隊（軍人の場合）、死亡年月日と場所、全10項目を明記した全4巻計4千5百頁を超える名簿を作成、死者・行方不明者の総数を最低でも9万5,940人と算出しました。ボシュニャク（ボスニア・ムスリム）の民間人が圧倒的多数を占めますが、この名簿は、敵対したセルビア人にも批判なく受け止められています。20万人を虐殺したとされる数字が大きく下方修正され、「加害者」とだけされてきたセルビア人側の犠牲者も一人ひとり記されているからです。

敬意をもって死者を追悼し、記録し、記憶する。この営みは、気の遠くなるような地道な作業の結果ですが、和解に資すると言われた国際刑事裁判以上に、いまだ分断の激しいボスニアで、民族間の融和の一歩を築いているように思います。

お知らせ

2019年度　進学相談会

2019年 第1回　4月27日（土） 第2回　6月29日（土） 第3回　9月21日（土） 第4回　11月9日（土） 13:30～16:30	**◆2019年度　進学相談会** 会場／立教大学池袋キャンパス内 太刀川記念館（予定） 対象／21世紀社会デザイン研究科に興味をお持ちの方 内容／修了生によるプレゼンテーション、個別相談会ほか 参加費／無料　申込／不要 主催／21世紀社会デザイン研究科 問合せ先／21世紀社会デザイン研究科委員長室 TEL.03-3985-2181（月～木）11:00～18:00

ベネッセ共同講座

2019年 3月2日（土）	**◆立教大学×㈱ベネッセコーポレーション共同講座** **「たまひよカレッジ」in 立教大学　2019年春講座** 会場／立教大学池袋キャンパス　14号館 内容／育休中のママ、パパの仕事復帰を応援する1DAY講座の開催を予定しています 参加費／有料　申込／Web専用ページよりお申込みが必要です 主催／21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所　共催／（株）ベネッセコーポレーション 問合せ先／（株）ベネッセコーポレーション

公開講演会

2019年 3月24日（日） 14:00～16:00	**◆人とひとが「まち」を育てる―ポートランドのまちづくりから学ぶ担い手のあり方** 会場／立教大学池袋キャンパス　11号館2階　A204教室 内容／オレゴン州最大の都市であるポートランド市における住民を主体としたまちづくりの成功事例をもとに、日本のコミュニティや地域と同市を比較しながら、社会デザインを担う人材のあり方について探究する。 参加費／無料　申込／不要 主催／21世紀社会デザイン研究科・社会デザイン研究所 問合せ先／21世紀社会デザイン研究科委員長室 TEL.03-3985-2181（月～木）11:00～18:00

発　行／
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長／萩原 なつ子
編集支援／木戸 さやか
発行日／2018年12月17日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報をホームページでお知らせしております。

21世紀社会デザイン研究科ホームページ
http://www.rikkyo.ac.jp/sindaigakuin/sd/index.html

21世紀社会デザイン研究科 Facebook
https://www.facebook.com/21csd/

デザイン：㈱ペンシルロケット